

# 日本人大学生の海外旅行における指向と経験と意欲との関連性 — 旅行者のモチベーション尺度の開発と活用の可能性の探索的調査 —

## Relevance between tourist motivation and experience of travel overseas through a scale of analyzing tourist motivation factor

松村 智恵 (Chie Matsumura) 指導：向後 千春

### 1. 問題と目的

インターネットなど、旅行情報を収集する手段が多様化してきている昨今、膨大な量の旅行情報の中で、旅行者には、自分に合った情報を収集することが、困難な事態が生じている。旅行者の旅行情報の選択基準を明確にするためには、旅行者自ら指向する旅のスタイルを確認することが可能な「旅行指向尺度」の開発が望まれる。旅行者のモチベーションに関する尺度の研究は多いが、旅行者が自らの旅行指向を確認するために、一般に実用化され利用されている尺度は、未だない。また旅行指向や経験が旅行意欲にどのように影響を与えているかについて明らかにすることが重要である。

本研究では、質問紙によるアンケート調査をおこなった。旅行者が指向する旅のスタイルを確認することが可能な旅行指向尺度を作成し、旅行指向と経験と意欲との関連性を明らかにすることを目的とした。

### 2. 方法

【質問紙】Fodness (1994) が旅行者モチベーションの一般枠組みの体系化に使用した質問 65 項目の評定 4 ページの質問紙を使用した。なお、質問項目は、佐々木(2000)の訳文をもとに Fodness (1994) の原文と照らし合わせ、検討して決定した。質問項目には、「休暇をとって海外旅行にでかける」という文章を加えた。回答方法は、全くあてはまらない (1) から、非常にあてはまる (7) の 7 段階であった。さらに、旅行意欲、休暇旅行での重要視項目、旅行嗜好行動、旅先情報収集源について、5 段階評定による質問項目を加えた。

【調査時期および調査対象】調査は、2007 年 12 月下旬から 2008 年 1 月初旬、首都圏 X 大学で実施した。人間科学部大学生および大学院生 298 名 (平均年齢 21.48 歳,  $SD=2.26$ )。女性 197 名 (平均年齢 21.28 歳,  $SD=2.33$ )、男性 101 名 (平均年齢 21.85 歳,  $SD=2.07$ ) であった。

### 3. 結果

【旅行指向尺度作成】旅行指向調査票 65 項目に対して、重みづけのない最小二乗法・プロマックス回転による因子分析をおこなった。その結果、天井効果を示した 3 項目と、十分な因子な因子負荷量 (0.45) を示さなかった項目を除外し、最終的に、6 因子 22 項目とした。回転後の 6 因子で 22 項目の全分散を説明する割合は、61.23% であった。

第 1 因子 (5 項目) を新規体験、第 2 因子 (4 項目) を回想・表出、第 3 因子 (4 項目) をリラックス、第 4 因子 (3 項目) を自然回帰、第 5 因子 (3 項目) を付加価値体験、第 6 因子 (3 項目) を交流・親睦と命名した。

因子項目は、Fodness (1994) と比較して、自然回帰因子が、日本人特有であることが明らかになった。さらに新規体験と回想・表出、リラックス、交流・親睦の間に正の有意な相関が見られた。また旅行意欲との相関は、新規体験 ( $r=0.54$ )、回想・表出 ( $r=0.26$ )、交流・親睦 ( $r=0.19$ ) で、1% 水準で正の有意な相関がみられた。

海外旅行指向と旅行意欲の相互関係を分析するために旅行意欲を従属変数とし、新規体験、回想・表出、リラックス、自然回帰、付加価値体験、交流・親睦の得点を説明変数とする重回帰分析を行った。解析は一括投入法による。結果より、新規体験と交流・親睦が、旅行意欲に影響を及ぼすことが示唆された。また交流・親睦では、すべての旅行指向と有意な正の相関がみられた。また回想・表出は、意欲と新規体験に有意な正の相関がみられた。解析の結果、

得られた標準偏回帰係数、単相関係数および、回答平均値を表 1 に示す。

表 1 海外旅行指向尺度に対する重回帰分析の結果

変数	標準偏回帰係数	単相関係数	平均値
新規体験	0.501***	0.54 ***	5.19
回想・表出	0.032	0.26 ***	5.22
リラックス	-0.079	-0.11 *	4.40
自然回帰	-0.021	0.09	3.78
付加価値体験	-0.082	-0.07	4.88
交流・親睦	0.125*	0.19 ***	4.16
R <sup>2</sup> 乗	0.315***		
従属変数: 旅行意欲	***: $p < 0.001$ , *: $p < 0.05$		

【男女による比較】男女間では、女性のほうが男性より交流・親睦指向が高く ( $t(296)=2.793$ ,  $p < .01$ )、旅行意欲も高かった ( $t(296)=3.247$ ,  $p < .001$ )。

【経験による比較】新規体験において海外旅行経験者の平均値 5.34 ( $SD=1.08$ )、経験無しは平均値 4.68 ( $SD=1.07$ ) で 0.1% 水準で有意差がみられた ( $t(296)=4.486$ ,  $p < .001$ )。また海外旅行経験者は、平均値 4.38 ( $SD=0.86$ )、経験無しは、平均値 3.81 ( $SD=1.04$ ) で、海外旅行経験者は、海外旅行経験未経験者より、有意に新規体験指向が高かった ( $t(296)=4.141$ ,  $p < .001$ )。

【旅行指向低群・高群による比較】旅行指向因子得点を平均値で低群・高群とし、旅行意欲の比較を行った。新規体験において、0.1% 水準で有意な差がみられた ( $F(1, 296)=58.950$ ,  $p < .001$ )。その他の項目では有意な差はみられなかった。新規体験高群は、旅先での観光や楽しみをより重要視し、自然風景観光、歴史文化、美術館博物館、芸術鑑賞、食べ歩き、スポーツ観戦を低群より嗜好することが明らかになった。また、指向と経験、男女間で交互作用はみられなかった。新規体験では、経験、男女の主効果がみられた。

### 4. 考察

日本大学生は、指向、性差、経験にかかわらず自然風景観光を嗜好する。女性は、男性より食べ歩き、買い物、海外旅行経験者では、歴史文化、美術館・博物館、スポーツ観戦等を未経験者よりも嗜好する。つまり多様な嗜好行動の選択肢を持っていることが旅行意欲に影響を与えると考察する。女性のほうが、意欲が高いのは、女性が交流・親睦指向が高いことにより、旅の話をする機会が多いことが間接的に旅行意欲につながると考察する。

### 5. 結論

本研究では、6 因子 22 項目の旅行指向尺度を作成した。自然回帰が、日本人特有であった。また旅行者のモチベーションは、新規体験と交流・親睦が旅行意欲に影響を与えていることが示唆された。また意欲の高低にかかわらず、自然風景観光は、嗜好行動として好まれる。さらに女性は買い物、食べ歩きを好み、海外旅行経験者では、歴史文化、美術館・博物館、スポーツ観戦を好むことが明らかになった。各々単独の要因により旅行意欲は増進することが明らかになった。大学生は、新規体験、回想・表出、交流・親睦が、旅行意欲に正の相関を示し、大学生が、人とのコミュニケーションの中で、多様な新規体験をし、旅の思い出を話題にすることにより、間接的に旅行意欲に影響を与えることが示唆された。